

大切にするのである。」と結んであるからである。

最後のことは人類、自然、地球を大切にするのであると私は勝手に拡大解釈した。

(永野 貞子)

(東京大学出版会・東京都文京区本郷七―三―一東大構内、電話
〇三―三八一―一八八一四、A五判一九八頁、二二六六頁)

小池猪一著『図説・日本の「医」の歴史』

著者は日本大学経済学部在学中、海軍予備学生から飛行科士官となり、敗戦後母校に復学し、近世史専攻。現在近世史史料研究所代表。

すでに共著として『海軍』全十五巻、『日本医学の夜明け』『海軍飛行予科練習生』全二巻、『海軍軍楽隊』『海軍特別年少兵』それに『海軍医務・衛生史』全四巻(昭和六十一年・柳原書店刊)という業績がある。

この著作の目的は「人を醫し國を醫し、人々を正しく導いた先賢医人の足跡」を世に残すことにあるという。気迫ある医学史書。

上巻は通史編、下巻は資料編からなり、七百ページ余。通史編第一章西洋医学伝来以前は①夜明け前の日本の医療②大陸医方受容の時代③専門医家の登場④李朱医学の普及と医学教育、第二章西洋医学伝来の時代①南蛮流外科伝来の時代②紅毛流外科伝来の時代までは五十ページにまとめられている

が『紅夷外科宗伝』の成立について、パレの『外科全集』のシッペル版及びシュルテルの『外科の兵器庫』からの引用などの最新の研究知見も参考にしてほしかった。従来の定説は覆えつていく。

第三章東洋医学の勃興は江戸初期の漢方医学の概略について六項目にわたり言及し、第四章実証医学勃興の時代は①医学から医学への移行時代②古医方派の興隆③腑分け事始め④蘭学事始めと解体新書⑤近代産科の発祥⑥江戸時代中期の医学。第五章は蘭学隆盛の時代では江戸派、上方派蘭学漢蘭折衷派の華岡青洲一門の紹介。ついでシーボルト在日六年間とその影響について先人の業績を要領よくまとめている。第六章幕末・維新の医事では後期蘭方医学の影響下の各科の近代化への動向について述べている。二宮彦可の没年が不詳となっているが文政十年十月十一日に没していることは、すでに三十七年前に評者が報告してある朝川善庵撰の二宮彦可墓碑銘を参考にしてほしかった。⑤戊辰戦争と軍陣医療では最近発見の資料が引用されている。⑥明治・医事制度の転換、ついで第七章日本の医学自立時代への記述は著者の力の入れたところであり、特有の視点からの考察が見られる。

第八章医科器械の歴史第九章歯科の歴史第十章くすりの歴史とつづくが、読者層を、専門研究者が対象なのか、一般向けなのかその焦点のずれと、記述構成が多面にわたり過ぎたきらいがある。しかし、通史の各章にわたって収載されている挿図・写真は著者が全国各地を廻り、自から調査撮影され

たものが多い。現代において所在の確認ができたこととその努力は脱帽するばかりである。

通史の各章、各項に引用された文献、論文を詳細にその章または項末に付したならば、本書の学術書としての価値は、なお一層その重みを増したであろうと思う。

しかし、「図説」ということを強調したこともあり、通史が医史学の学術書と啓蒙書の中間的なものとしてまとめられなければならない宿命的な条件から、著者の意を十二分に満たすことができなかつたのかもしれない。

下巻の資料編は著者の精力的な実地調査の旅日記であり、足あとそのものである。著者の前歴の海軍士官流に言えば「航跡」である。「全国医事史跡探訪」の分類が面白い。

①腑分けの史跡九、②種痘の史跡八、③医療施設の史跡十四、④医学教育の史跡十六、⑤歯科の史跡三、⑥薬事の史跡八、⑦今に遺る医事史跡十五「先賢医人史跡探訪」もまたユニークの分類で①江戸時代以前の先賢医人史跡二、②江戸時代初期先賢医跡九、③江戸時代中期の先賢医人史蹟十七、④江戸時代後期の先賢医人史跡二十三、⑤明治時代の先賢医人史跡二十四、⑥来日外国医人の史跡十七。普通は府県別になるものを時代区分によって史跡を分類してあり、縦の流れでまとめられているのが面白い。

「全国医事博物館総覧」は①医の博物館三十一、②歯の博物館四、③薬の博物館八。実によく歩き、その各項ごとに要領よくまとめである。

先賢医人史跡の探訪にはなくてはならぬ案内書の役割りをはたしているが、墓碑については、その所在のより詳細な位置（市町村名、町名、番地）墓域名と墓地整理番号、墓地内での略地図。探訪への道順などが併記されていたならばと惜しまれる。それに、欲を言えば、墓碑銘のあるものは原文のままの碑銘が記録されてあつたならば、医史上上の資料的価値がより重く評価されることとなつたにちがいない。

記載の誤り、誤植は著作としてさげがたいのであるが、評者に関係したものを挙げると、一五〇頁の「パームは、セイロン島でオランダ人牧師の子として生まれた」とあるが、イギリス人（スコットランド人）なので指摘しておきたい。全く一人の足で書いた、足で描写した図説日本医事略史ともいふべきものである。

専門的な立場からみると、各章、各項を、その専門分野の医史学者から、粗稿の段階で目を通してもらつてあれば、より精度の高い著作として仕上がつたのではないかと思われる。

これだけの大著であれば、人名、事項についての総合索引と、医跡の分布地図が望ましかった。巻頭のカラー図版はその選択もよい。

日本の医学の自立を焦点におき、独力でまとめあげられた努力には心から敬意を表したい。医史学にも多少とも興味を持つ医師、医学生にとっては、格好の入門書とも、医歯薬関係史蹟のガイドブックでもあると言える。

〔大空社 東京都北区赤羽二―三六一―二、電話〇三―三九〇二
―二七三二、平成五年十月刊、上巻四四五ページ、下巻二七一
ページ、四八、〇〇〇円〕

室賀正信著『沼津・室賀病院―医系家族百年の記録―』

本書の中心人物室賀録郎は明治九年東京医学校を卒業し、同校助教となった。十二年たまたま録郎の担当患者を見舞に來た江原素六駿東郡長(のち貴族院議員)にその博識を認められ、ちょうど駿東病院で院長を探していたので、時の大学医学部総理心得長與專齊に懇望し、録郎の承諾も得て駿東病院の院長として赴任して貰った。

本書は室賀の家系、室賀録郎と沼津の病院経営、後継者―土屋国太、医学に貢献する室賀一族の四章からなっているが、著者が最も力を注いだのは第二章室賀録郎と沼津の病院経営と思う。録郎が沼津に赴任すると、名声をききつけて、四方から患者が集まった。また駿東郡全体の公立病院として、沼津だけでなく、御殿場、佐野、静浦等にも分院あるいは出張所を設けた、この章では東京の大学と地方医療についてかなりくわしく述べている。

録郎は寡黙・温厚篤実でしかも丁寧親切であった。また生地小諸の親戚の人達にも同様であったので、小諸から出て来て厄介になった人も多かった。著者定信氏は早大を卒業し満

鉄調査部に勤務ののち、東京海上火災の常務取締をつとめ、のち大来佐武郎(元外相)らと総合研究所フォーラムを共に創設している。その父は録郎の甥で、陸軍士官学校卒、日露戦争にも従軍したが、大正六年当時の軍縮政策のため少佐で退役となり、同年録郎をたよって、室賀病院に入り事務を担当した。

第三章では後継者土屋国太についてのべている。彼は長野県香掛(現中軽井沢)の生れで、小諸の医師佐野義質の紹介で録郎を紹介されて、沼津に出て沼津中学を卒業した。録郎は国太を我が子のように可愛がって面倒をみた。明治四十五年国太が京都府立医専を卒業すると、録郎の長女栄子の夫賀繁の勤める台湾総督府付属病院内科に就職し、のち外科に転じ、外科医としての修業をした。

大正三年台湾から帰った国太は室賀病院に移り、四年録郎に代って院長に就任した。その前録郎は駿東病院長を退職し、私立室賀病院を経営していた。国太は俠気のある人望家として、病院の発展に盡すとともに、町民の爲にいろいろと努力した。

著者定信氏は少年時代、この室賀病院の一族である室賀・土屋の子供たちと親しく遊んだが、その思い出が随所に書かれている。

二度に渡る大火災と空襲によって、室賀病院は今はなく、資料等も烏有に帰したので、詳しい事は不明だが、記憶によれば沼津一、二の病院であった。